

## 大学卒業1年目の風景 — 女性の20代研究・その2 —

工 藤 保 則

本稿は「女性の20代研究」の一環として、工藤（2005、2006）に続き、「地方出身で都市の大学に進学した女子大学生」だった3人へのインタビューをまとめたものである。インタビューでは、主に、仕事（勉強）のこと、家族・恋人のこと、将来のことについて語ってもらったが、それらは結果的に「自己実現」に関することが中心となった。

キーワード：就職、自己実現、都市と地方

### 1. はじめに

就職活動に焦点をあわせながら大学4年生の日常についてのインタビューをまとめた工藤（2006）では、以下のような記述を行った。

日頃、大学生と接していて強く感じるのは、就職や働くことに対する過剰な意識である。あれらは、大学に入学するとすぐに、いわゆるキャリア教育を通じて、就職のことを意識させられる。キャリア教育の場では、「即戦力」「資格」が強調され、そのためか玄田有史も指摘するように「自分がやりたいことを、早めに、見つけなければならない」「早くやりたいことを見つけなければ充実した人生は送れない」というプレッシャーが今の若者には大きくのしかかっているように感じる（玄田2005:99）。また、その働くことへのプレッシャーに押しつぶされると、香山リカが事例を交えて紹介する「就職がこわい」状況に陥るようである（香山2004）。いずれにしろ、意識が過剰なのである。

意識が過剰といわれたところで、やはり、大学4年生にとっては、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」に就くことが重要であることには間違いない。そして、それを実現させるために、熱心に就職活動をするのである。就職活動は、現代の大学生にとって、大学生活の中での、いや、人生の中でも、かなり大きなライフイベントとなっているのである（工藤2006：118）。

その大きなライフイベントにおいて成果をあげ、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」と思えた職業につくことができた大学生は、その後、実際の職場ではどのように感じながら働いているのだろうか。本稿ではそれを、大学卒業後1年たった時点でのインタビュー調査から探ることにする。なお、インフォーマントは、工藤（2005、2006）同様、「地方出身で都市の大学に進学した女子大学生」だった3人である。

### 2. インタビュー調査から

ここで、3人のインフォーマントについての簡単な紹介を行っておく。1人目の広部理華は、

石川県小松市出身で京都市にある大学に進学し、卒業後は製薬会社に就職した。2人目の青木理恵は福井市出身であり、京都市にある大学を卒業した後は福井に戻って医療系の専門学校に進学し、理学療法士を目指している。3人目の宮腰英理は岐阜市出身で京都市にある大学を卒業後は岐阜に戻り、実家から名古屋市にある携帯電話会社に通勤している<sup>1)</sup>。

彼女らに対し、2006年3月から5月にかけて個別にインタビューを行った。インタビューの内容は、会社（専門学校）のこと、仕事（勉強）のこと、家族・恋人のこと、将来のこと等である。なお、インフォーマントの氏名や会社名など固有名詞は一部変更している。

#### 1) 広部理華（2006年5月4日インタビュー実施）

##### 入社してから

4月からはそれまでと全く違う環境でスタートでした。最初は千葉の幕張にある研修所で、朝9時から夜は6時くらいまで業界の認定試験のための勉強をしていました。最初のほうは「社会人として」という内容でわかりやすかったんですが、実際に業界の勉強だとか、薬学の勉強になると、ついていけなくなっていました。基礎の基礎でつまづいたせいで、とんとんとんと追試になったりしていました。

毎朝、前日にやった内容をテストするんですが、最初は1教科だったのが、だんだん3教科になり、それで1教科追試になると、4教科受けなければならなくなり、そうなるとうすうすわらなくなっていて、追試の悪循環に陥っている時期がありました。みんな1回は追試を経験していたとは思いますが、やっぱり薬学系出身の子は少なかったですね。GW明けた頃から、「これではマズイ」と思い出し、勉強法を朝方に変えたんです。授業開始が9時からなので、それまでに朝ごはんとか身支度をすませるんですね。だから、6時から8時まで勉強するようにしました。それが成功して、なんとかついて行けるようになりました。その勉強期間の間に、GWの前に「ふるさ同行」という2日間だけ故郷の病院をまわるという体験もありました。

6月の第2週に和歌山に配属が決まりました。去年までは配属希望地域を聞いていたんですが、希望を聞くとその通りにならなくて、ショックを受けて辞めてしまう人がいるということになり、私たちのときから聞かないことになったそうです。が、一応面談はあって、新人のグループで「どんな仕事をしたいか」とか「今後のビジョンは」とか「どんなMRになりたいか」とか話し合ってたんです。その時は、「大学で県外に出ているので、また世界を広げたい」と思っていたんです。それで、「この間、ふるさ同行で金沢に行っただろう。金沢の所長は若くてやり手で活気のある営業所だったろう。あの所長の下で働きたいよね」って聞かれて、「イヤです」ってこたえたらすごく笑われて、「どうして」と言われました。その時に、県外に出て成長したいということと言ったんですよ。それで「どこでもいいんだね」って言われて、「18歳まで、寒いところだったので、暖かいところがいいです」って言ったんです。そして、蓋を開けたら和歌山営業所だったんです。「和歌山か、もっと遠くかと思ったな」ときょとんとした感じで辞令を持って、席に戻ったんです。県外に出たかったし、暖かいところというのも希望通りと言えば希望通りで、嬉しかったですね。まわりを見たら、泣いている子もいればすごく喜んでる子もいて、様々でした。その子自身の出身が地方か都会かでも色んな反応の違いがありましたが、その後のことをみていると、配属が決まったときの一喜一憂と、その後のことは違うんだなと思っています。

7月に和歌山へ行ったときは、営業所は1番若い先輩が3年目で26歳、次に29歳が2人という状態で、MRは6人であとは所長と事務のお姉さんという構成だったんです。だから20代が3

人、30歳がいなくて、40代が3人という営業所でした。

職場にはPC、「パーソナルコーチ」という新人担当の先輩がいるんですが、私が配属になった時、そのPCの方は優秀な方で表彰されてアメリカ研修に行っていたんです。それで、その1週間だけ、課長代理の40代の先輩に同行していたんですが、その人もすごいできる人で、成功しているMR像が詰まっているような人でした。「常にこんないいことはないよ」ってその人自身もおっしゃっていたんですが、その時はいいこと続きでした。10年間、うちの製品が取られていなかった病院に、大量に製品が取られることになったりとか、同種品をたくさん入れていた病院がうちの製品に一本化したりだとか、新規の注文が2件入ったりだとか、立て続けにいいことがあって、その1週間に営業所きっての願いであるようなことが叶うようなことばかりが起きたんですよ。普通はお礼に伺うのは所長同行くらいなんですけど、大阪から支店長が来ていたりしていました。

PCの方が帰ってきてその人に同行する日が始まると、それは大変なことになりました。その人はちょっと変わった方で最初すごく厳しくして、新人に仕事はなんたるかを教えるというタイプだったんですね。雑談すらもかみ合わなくて、一緒に行動するのがすごくしんどくて、「この先輩は私のこと嫌いなのかな」って思うくらいでした。でも、和歌山営業所は女性社員は私が初めてで、そのPCの方も含めて皆さん、私をどうかまえばいいのかがわからなかったのだと思います。

そんな先輩の態度が和らぎ始めたところで、フォローアップ研修ということで、8月のお盆明けから1ヶ月研修所に行くことになりました。7月から配属になって8月の半ばまで過ごしたんですが、なじめていないまま、一旦、営業所を離れることになりました。その1ヶ月を終えて戻ってきたら、自分の担当エリアが決められていました。私が担当するエリアは50歳手前のMRの人が受け持っていたところで、その方が秋の異動の時期に転勤することが決まってその担当を継ぐことになったんです。エリアが決まったということで、またわくわくして、自分でまわれるんだという気持ちだったんですが、引継ぎ期間の同行が今までで1番しんどかったです。

その50くらいの先輩にとって、営業は自分で要領よくやればいくらかでも要領よくできる仕事みたいで、あまり病院をまわられていなくて引継ぎ自体もすごく適当でした。そのエリアをその前に担当していた先輩が「俺があの人に引継いだときには80軒あったけど、何軒引継いでもらった」って聞かれて、手帳を開いて数えてみたら30軒で半分以下になっていたんですよ。それで、「お前も大変だけどがんばれよ」って言われて、その先輩も転勤してしまいました。なので、前任者も、前々任者の方もいなくなった状態で、私が担当しなければならなくなっていました。とりあえず、前々任者が持っていた数くらいには戻すことを目標にしようと思いました。これは今でも目標なんです。

それで初日、記念すべき1軒目、「お世話になります、新しく担当になりました広部です」って挨拶に行ったら、「やっと来たか、前々任者にはお世話になったけど、その後の人は1回も来なかったよ」ってすごく言われて、それに衝撃を受けていたんですけど、そういうふうに言われることにも慣れてきて、怒られることにも慣れ、いい先生にも出会いつつ、ゆっくりここまで来たような感じです。

#### 仕事上の悩み

最初は怒られることが耐えられませんでした。今は、怒られつつも、信頼を取り戻して、使ってもらえるようになったらいいと思っています。最初はとにかく研修で教わったそのままを話していました。典型的な型にはまった製品のPRで、皆さん新人だってわかるので「ふんふん」っ

て聞いてくれるんですが、何回か通ううちに私自身に興味を示してくれるというか、「どこの出身だったっけ」とかいう話になり、私は小松出身なのでそれを話したら、「小松製作所やな」という人と、「空港やな」という人と、「ヤンキースの松井やな」という先生に分かれて、私はその先生の食いつきに依拠して話題を変えていくんです。松井だったら、「私、家がすごく近くて、最近資料館ができたんです」とか、製作所だったら「地元の企業で人気があるのはそこくらいなんですが、全国でも知られているんですか」とか話をふってみたり、空港だったらゴルフされそうな先生には「片山津カントリー行かれたことありますか。あそこは騒音の中で打たれているみたいですね」と言ってみたりして。

実際に大変だったのは、保険のほうで、薬を使いすぎたりするとカットされるんですよ。1人当たりの点数が高くなると「これは薬を使いすぎなんじゃないか」ということになって、返ってきたりするんですよ。するとそれが自損ということで先生が負担しなければならなかったりするんですが、エリアの1番の大口で、1番出ている製品が保険ですごく切られて、厳しくつけられて処方止めがっていて、その医院での処方が半分くらいになってしまって、参りました。それでも先輩方にすごく助けてもらって、やっとここまで来ました。1人立ちして半年たって、4月からまた新しい期に入って2ヶ月目です。私の営業所には今年、新人は来ないと思います。今の営業所は7人中4人がこの地域には新しい人なので。

働き出して、いい先生もいる一方で、私の感覚からすると信じられない人がいるんですよ。外面がいいというか。この間も接待で食事に行って、翌日に「ありがとう、おいしかったよ」と言われたんですけど、その裏で他の先生方や業者さんに「あのメーカーに連れてってもらったけど、こんなマズイところに連れて行かれて」という話をしていたんですね。連れて行ってもらっていて、しかも表面上はいい顔をしていて、実は裏ではめちゃくちゃ言っているというのが信じられなくて、そういう人にもヘコヘコしないと行けないのはストレスでもあるんです。でも、一方でお土産を交換し合うような仲になる人もいます。いろんな人がいるのは避けて通れないんだなあとと思います。他のメーカーの文句とかも聞いたりするんですけど、それを聞いた以上は私のことも他のメーカーに言っているだろうし、信用できないというか。世の中の不思議なところをいろいろ目のあたりにしました。

#### 転職について

MR認定試験の資格さえ持っていれば、どこにでも転職できるんですよ。特にそれこそうちの会社の規模で成績を伸ばせる人だったら、どこの会社に行ってもやっていけると思います。うちの会社は個人の営業力で売っているような会社で、会社として大きくないし、ほんっとも売れる薬も少なく、価格交渉面も機能していなくて、あんまりサポートがよくないんですよ。がんばる人にとってはうまくまわりが機能していなくてイライラすることがあって、転職する人が実際に多いんですよ。でも、MRとしての転職は、働きやすさと売る製品とが変わるだけで、何も変わらないんですよ。結局、お医者さんの小間使いとして数字を達成してっていうことです。今さらなんですが、もっと生産性のある仕事をしたいなと思います。研究所で製薬していい薬を開発するんだったら、やりがいはあるんだと思うんですけど、営業の面では医療の先端を担ってという感じがしないんですよ。でも、MRは割がいいというか、給料もいい。営業職の中でも、門前払いも少ないですし、医療の向上のために先生方もとりあえずは耳を貸してくれるので、営業がしやすいほうみたいです。そんな環境ですから、他の業界には移りにくいみたいで、営業をやってきた人がMRになって成績を伸ばすというのはよくあるパターンみたいですが、逆

になると給料も落ちちゃうし、あまりないみたいですね。とりあえずは簡単には辞められないので、いまは石の上にも3年だと思っています。「次にやりたいことが見つかるまでは辞められないなあ」と思うので、3年たってやりたいことが見つからなければMRをやっていると思います。

#### 働くということ

働いてみて、あらためて思ったのは「自分の親はすごいな」ということでした。私は1年働いただけで精神的にも肉体的にもしんどいなと思うのに、30年間続けてやってきたというのは、お父さんもお母さんもすごかったんだなと。やっぱり守るべきものと言うか、家庭があるとやるしかないんだなと思います。

うちの会社でも簡単に辞めていった人もいるんですけど、いまの時代って、辞めてしまっても親とかまわりが簡単に許すようになってきているんだと思います。「つらかったの、じゃあ辞めていいよ」って。親世代はつらくても辞められない状況だったのに、自分の子どもたちには辞めてもいいよって言うのは不思議ですよ。それこそ、自分ががんばってきたんだから、1年で辞めたって子どもが言い出したら、「石の上にも3年や」くらい言うたらいいいと思うんですよ。でも、そうじゃないんだな、と。私は親には仕事の愚痴が言えないところがあって、対外的にもストレスがたまるし、社内でも仕事が上手くまわっていかないことがあってそういうストレスを感じるんですけど、辞めたいということまでは親には言えなくて、言っちゃダメな気がしています。私は、MRって結婚して続けられる仕事ではないって思ったんですよ。だから逆に、いつかは結婚して、このMR職を辞められるであろうという思いがあるから、いまはしんどくてもがんばろうと思えるんですよ。仕事は続けたいとは思いますが、このMRという仕事は結婚したら無理だなと思います。夜の10時に帰ってきて、いま自分だけの生活でさえ、部屋は汚くなり、ゴハンはどんどんまともじゃなくなっていくのに。なんか、定時に帰れるということはいらやましいことだなと思います。

#### 家族のこと

最近、おばあちゃんから「誰も来なくてさみしくてならんのや」って泣きが入っていて、うちの親族の主なので、なんとか私に帰ってきてくれという話になったんですよ。おばあちゃんの人生があとちょっとしかないんだとしたら、帰ってあげたいんだと思うんですよ。だから今は作戦をたてていて、会社には「介護が必要だから」って言うたらいいいのかなとか。たまたま金沢は女性がいないので、配属されやすいんじゃないかなと思うんですけどね。でも、今年入ってきた新人が金沢に配属されてしまったら取られてしまうので、一刻を争うんですよ。そろそろ面談の季節なので、「おばあちゃんがよくなって、父も母も働いており、私が帰ると少しでも助かるようなので、私もそのほうが続けやすいですし」とかうまく言わないといけないんですけどね。それこそ公務員に転職なんかどうかなって思ったんですが、いまさら受験勉強もしんどいですし。今まで成長しようと思ってやってきたものが、公務員になるという選択をすると止まってしまうような気がして。今の仕事はきついですが、数字での評価がついてきますし。

私は以前のインタビューで「がんばることがいいと思っていたけれど、先の見えないがんばりをしていた」と言ったじゃないですか。今もそのとおりで、その疑問は変わらないんですよ。「自分のやりたくないことだって気づいてやっているのに何の意味があるの」って辞める子に言われて、私は逆に「どうしてそんなに決められるの」って思って。難しいんですよ。資格浪人して、薬剤師とか税理士とか目指していた子を見ると、ずっと前から目指していたんだろうなと思って、すごいなと思うんですけど。私はがんばっているんですけど、先が見えていないと言うか、が

んばろうと思って県外に出たけど、後で振り返ったら、おばあちゃんがさみしがっているし、弟がいなくなって、おばあちゃんが1人になることも先に気づいていたはずなのに。まわりまわってそれで良かったのかと思って。いろいろできたらいいんですけど。時間があっても上手く利用ができないというのはイヤなんですよね。

これからのこと——25歳、30歳

25歳の私はうまいこと異動できていけば、おばあちゃんの希望通り地元で働いていると思います。変われなくても3年は続けるという意志なので、和歌山でいまの仕事をしていると思います。30歳になったら、結婚はしたいんですけど。

社会人になると、結婚のことを考え始めました。自分が持っている職業観とか、いろいろ考えていることが合わなかったら、結婚することができないだろうなぁと思います。子育てとか、家庭のありかたとか、すべてに関わってくると思うので。

いま付き合っている人は同期の人なんですけど、その人も営業に合わないけどやっている人なんです。むしろ企業がもともと合わなくて、自由気ままに北海道で育ってきて、男の子だけど私以上に辞めたいって思っているんですね。なやんでいる度合いが違うんですよ。私みたいな職業観じゃなくて「やりたいことをやりたい」ってすごく悩んでいて、沖縄にすごく憧れがあって、いずれは沖縄でお店を持ったりしたいらしいんですね。私からしたら1年目で辞めたいとか言って、そんな夢みたいなことがかなうわけがないと思って、人とは違う生き方をしようと思ったら、倍以上のエネルギーがいると思うのに、その彼はそんなものに耐えられない人だと思うんですよね。こんな話を彼としていると、「そんなに安定が大事なのか」って言われるんですよね。そうすると、本当に結婚とか難しいなと思います。まだ沖縄に行きたいんだったら、沖縄県庁に入るとか公務員になるとか言われたら納得できるんですけど。入社の動機は「自分は北海道しか知らなかったから、全国展開している会社で働いて、いろんなところを見てみたかったし、MRという職業にも興味があった」っていうことらしくて立派なんですけど、いま大阪勤務で融通のつくところにいるのに、もったいないって思います。そういう話をしていると「じゃあ後2年はがんばろうかな」って言っているの、来年のインタビューで「彼、改心しました」って言えたらいいんですけどね。

私がいままでやってきて築いてきた考えを理解してもらえないのはツライ。大卒という資格を持って、今の仕事ができているという状態は特別なことなんだよっていうことがわかってもらえない。親にも申し訳ないし、彼氏の親は「いいよ」って言ってくれるのかもしれないけど。

小学校のころの6年は長かったのに、20代の残りのこの6年なんてあっという間ですよ。健康がとりえだったのに、この1年はのどがイガイガになって、高熱が出て、扁桃腺がはれてという時期もありました。身体は正直ですよ。

## 2) 青木理恵(2006年3月20日インタビュー実施)

進学してから

最初は自分が高卒の子とは気持ちが違うということで、どういうキャラで行こうかなと考えました。45人クラスで13、4人が社会人入学なんですよ。あとは18歳で、高校卒業して専門学校に入った人たちでした。社会人の人たちも私の年齢に近い人は少なく、30代半ばの人が大半でした。どちらかというと精神的にはそちらに近いんですけど、年齢的には18歳の子達に近い。どうしよっかなぁと考えてたんですが、流れに任せました。

最初は教養課程みたいなものだったので、大卒組は取らなくて良い授業がたくさんあったんです。だから楽チンで、慣れるのにはちょうど良かったです。空き時間に自分の勉強もできて、のんびりした感じではじまったんです。6月くらいからテストが始まって、1ヶ月くらい続けました。テスト後に大人組で打ち上げをしようということになって、それで結構仲良くなって楽しくなってきました。7月もテストがあって、8月は夏休みって感じでした。勉強は保健医療福祉制度とか法律のこととかがまずあって、無難にこなしました。大人組の人にはみんなあると思うんですけど、やっぱり18歳の子には負けてられないなというのがあって、全科目90点以上は取るというような気持ちでやりました。18の子達はノートを借りてコピーというのが多いのですが、自分はそんなことはできないからがんばろうという変な気負いがありました。

8月は1ヶ月くらい夏休みだったのでアメリカに20日間くらい行ってきました。それでほとんど勉強もせずに終わってしまって、またすぐ学校が始まりました。そうそう、アメリカに行く前、8月のはじめに病院見学があって、それは行っても行かなくてもよくって、自分でアポとってって感じでした。でも、私は8月はじまってすぐに県立病院と、金大付属病院に行きました。

9月にまたテストがあって、その後、5日間連続で生理学実習があったんですが、グループワークなので、これが大変だったんですね。5つのテーマがあって、血液を採って赤血球の数とかを調べたりすると、感覚検査といって感覚を検査すると、呼吸を肺活量とか色々計ってやるのと、カエルの解剖とかを行って筋肉の収縮を見たりするものと、あと1つなんだっけな。とにかく実習は5日間で終わるんですけど、その後のレポートがすごい大変でした。その5つを班で仕上げるんですが、1つのテーマだけでA4で40~50枚いってしまいました。うちの班には私と31歳の女の人、34歳の男の人がいるんですけど、その3人がそれぞれテーマごとの調査を進めて、みんなすごくて、半端じゃない量のレポートになりました。この学年は大人組が引っ張っていきようになっていて、寝ずにレポート書いたり、精神的にも肉体的にも激しくて、本当に勉強したって感じの1年でした。

10月は専門課程に入ったので、授業が朝から夕方までびっしり埋まってきて、慣れるのが大変な時期でした。大学よりも授業数は多いかもしれないですね。11月の終わりから12月にかけてテストでした。12月はクリスマスくらいから休みがあって、京都に行っていました。1月は7日まで休みだったので、年明けにまた京都に行きました。休み明けの1月はテストがとても大変で、毎日がテストでした。テストが終わって家に帰ったら、また翌日のテスト準備があるから、ちょっと寝て、9時くらいに起きて寝ずにそのままというコースでした。最後の最後の残り1個か2個を残して39度くらいの熱が出ちゃったんですよ。

2月は特に広い範囲の医学療法評価学という授業の実技テストがありました。PTはどの部分がどうなっているかを評価してリハビリを考えていくので、1年目はその評価を学ぶ授業があったんです。脳神経の評価は12項目あるんですが、嗅神経だとタバコとかコーヒーなどの香りをかがせて、それがわかるかどうかを調べるんです。視神経だとどの程度視野があるとか、舌を出させて舌下神経を見るために動きを見たりします。ペアを組んで、先生の前で言われた部分の評価をするという実技試験でした。覚えることは多いし、PTとして患者さんと接するときそのようにしないといけなかったし。感覚の検査もするんですが、針で手や指を触って、末梢神経がだめなのか、脊髄がだめなのか、中枢神経がだめなのかを見るんです。呼吸だったら、排気量を計る4つの装置を使いこなして、その記録も読めないといけないんですね。血圧をはかる意味とか、どれだけあったら正常かなどを、1ペア1時間半くらいかけて先生がチェックするので、完璧に

覚えていないとボロが出るんですよね。その実技テストをパスしないと2学年目に上がってはいけないということだったので、ペアを組んだ子の家にいって、夜中泊り込んでやりました。

その子は1人暮らしをしていて、大阪から来ている18歳の子なんですけど、家が近かったのも、本当にやりやすかったです。まわりには私がスパルタに指導しているように見えていたみたいですが、その子的にものんびりした性格なので良かったみたいです。テスト前はみんなすごく緊張していました。ある意味、大学より専門的で、全てに意味がある感じがしました。

#### 学校について

たいていの子はみんな、18にしてはしっかりしているというか、やる気がありますよ。特に女の子。女の子が引っ張って行っている感じです。真面目にがんばっていて、男の子はちょっとまだ子どもで頼りない感じです。多いのは家族が医療関係の人。親が看護師さんだったり、お兄さんが検査技師だったり。PTという仕事を知るには、そういう環境の人が多いです。聞いてみると納得なんですけど、そうじゃないと知らない仕事ですもんね。男の子も頼りないって言っても、おおむねがんばっていると思います。大学って遅刻したり、来なかったりしても、自由じゃないですか。でもいまの専門学校は座る席も決まっていて、どの授業もメンバーが一緒だから、誰が来て、誰が来ないかというのが一目瞭然で、高校みたいなんですよ。来ない子に対して、みんながお互いに厳しいです。先生からも呼び出されるし、担任の先生もいるし、掃除の時間もあるし、やっぱり高校の延長みたいな感じなんですよ。

学校に対して不満はありますね。先生があまり親身でないというか。ほとんどの先生は学校で教えているだけではなくて、病院で働いている人なんですけど、外部の先生はただ本を読むだけの授業だったり、授業が終わったらすぐ帰っちゃって質問をする時間も与えられなかったり。私が直接体験したことではないんですが、あるグループワークでいろいろな福祉用具を調べるために産業医療療法士のOTの先生方に質問しに行ったら、とても態度が悪くて冷たくされたらしいです。大人組の人たちのグループだったんですが、みんな怒ってました。PTのクラスの子がOTの先生に質問に行くこと自体があまりないことだったみたいで、邪険に扱われたらしいですよ。自助具ってというのはOTが専門なんですけど、細かいことを教えるのは面倒だったみたいです。大人組の人は学費を自分で払っている人もいるので、先生に対して求めるものも多くなりますよね。学費は1年間では100万くらいだと思うんですけど、大学と同じくらいですよ。

ちょうどこのあいだ卒業式があって、わたしが入学する前から仲良かった人とお茶をしながら話をしたんですね。これから先、どうなるのかとか。そしたら、この過ごした1年間とは比べ物にならないくらい、特に3年はきついついていってました。想像を絶するらしいです。3年生はほとんどが実習になるらしくって、6週間を3回行って、3週間を1回行くそうです。全部合わせると5ヶ月くらいになるから、春から卒論にかかって、それができたらすぐ実習で、12月帰ってきたら国試の勉強があるらしく、「あれ、夏はあったっけ」っていう感じで、いまの大変さとは比べ物にならないらしいです。「記憶が飛ぶよ」って言われて、笑ってしまいました。実習中は2時間とか3時間とかしか寝られないらしいです。実習は県外なんですよ。全国に散らばるんですけど、6週間の実習の3回のうち1回は必ず県外だから、レオパレスを学校が借りてくれて、そのために学費が高めに設定してあるらしいです。たしかに学校でも3年生はほとんど顔を見ないですからね。私たちの代で専門学校としては終わりらしくて、留年させられないんですよ。なので、再試が何回もあって、「何回もチャンスをあげるから、とにかくあがってくれ」っていうことらしいです。短大になったら、担任制もなくなって、もっと放任になるみたいです。



### 友達について

学校では大人組と仲良くしていて、頻繁に飲みに行ったりしています。でも、一緒にいるのはペアで実技テストを受けた18歳の大阪出身の子です。大阪から福井に来たのは、親戚の人に強く勧められたらしいです。たまにその親戚のところに泊まりに行ったりしているようです。その子はお姉ちゃんが看護師さんらしいです。その子は家も近くて、お互い車もないので、自転車で行き来しています。

最近、友達に結婚する子が多いんです。23歳の3月、4月は結婚ブームなんですかね。大学時代の友達で大阪の高校に講師で入った子も1年勤めて、そのまま仕事は続けつつ、結婚するみたいです。高校時代から7年付き合っ、今しかないと思ったらしいです。旦那さんになる人は今年からロースクールに通うらしく、生活費は彼女が稼ぐそうです。女子高出身で、お嬢さんタイプだったので、思い切ったことをするなあと思いました。自分が思い描いていたパターンと違う生活を始める人がいると、なるほどそういうのもあるのかって驚きますね。

### 地元での生活

帰ってきてみて、家族と過ごすわずらわしさはありますよね。安心感とかそういうものと引き換えに、気楽さとか気ままさがなくなりました。それに親は花嫁修業をさせたいのか、ちょっと片付け方が甘いとか指導が入るんですよ。結構細かく言われるんですよ。「もうちょっと女の子らしくしなさい」とか生活態度の面で、高校のときより厳しくなったような気がします。でも、家族とはうまくやっているといます。ケンカはたまにしますけどね。学校とか勉強の面ではあまり干渉してきませんしね。「早く寝なさい」とか、「あまり無理しないで」というようなことを言われます。体調を心配しているみたいですね。

### 恋愛について

彼氏は去年の5月にアメリカに留学して、予定では今年の10月くらいに帰ってきます。いまのところは京都の高校の先生になるのが希望らしくて、大学ときは地元の山口で先生になることを希望していたんですが、彼の考えも変わってきたそうです。「京都の病院も視野に入れておいて欲しい」と言われました。だから将来には選択肢が2つくらいあって、ひとつは福井に残って3年くらい働いてその後京都とかの病院に移ってそして結婚する、もうひとつは最初から京都とかに就職する。福井の病院で1年くらい勤めて、他県へ移るというのは、病院に対しても迷惑だし、自分にとってもわかってきたころで移るのは意味がないと思うんですよ。彼が福井に就職するということはないと思います。

親が最近、福井にいて欲しいオーラを出し始めて、「やっぱり女の子は家の近くにいて欲しいよな」と言われて、同時期に彼氏からは京都に来て欲しいという希望を聞いたので、言い出しにくいです。でも、親はどの程度を家の近くだと思っているのかがわからないんですよ。もしかしたら、彼の故郷の山口には行って欲しくないという程度のこともかもしれないし、そう思わせておけば、京都と言ったときに、「まあいっか」というふうになるんじゃないかと、様子を見えます。専門学校のお金も出してもらっているんで、負い目というか、卒業したらすぐに京都に出してしまうのも悪いなという気持ちはあるんですが、でも周囲の人に話すと、「親は子どもが好きで人と幸せになるのが一番いいんだから、それは気にしなくてもいいんじゃない」と言われるんですが、どうなんでしょうね。

### これからのこと——25歳、30歳

25歳の自分はやっとこの負い目から抜け出せて、自分で稼げることへの自信がついてくる頃か

なあと思います。稼いだお金で、たいしたことじゃないですけど、親に食事をごちそうしたいですね。それからきっと結婚のことをかなり具体的に考えているときだと思います。就職と同時に結婚している可能性もあるので、働き始めて、同時に奥さんになっている可能性もあります。

30歳の自分はいずれにせよ出産してたいです。子どもは3人欲しいので、30歳には1人目を産んでおきたいですね。仕事の方は、子どもを産むときに1年くらい育児休暇を取ったとしても、復帰できたらいいなと思います。結構みんなが言うことなんですけど、30には1人目を産みたいと。細かく将来のことを考えて、いろんな人と計画を話したりしますね。結婚はみんなの関心事ですよ。1人だけ「結婚する意味を見出せない」と言っている子もいるけど、ほかの子はたいてい結婚はしたいと思ってますよ。

この1年は悪くなかったです。学ぶのが楽しくて、1歩、1歩だけど、実感をもって進めたなと思って。PTの先生に1日ついて仕事を見たときに、ホントにすごい仕事だなと思って。広い領域で、色んな治療をする。この仕事に就きたいなって心から思えるから良かったなと思います。みんなで飲み会をして愚痴を言い合ったときに、31歳の女の人が「自分は癒せるPTにはなれないな」とか言っていて、わたしには「元気をもらえるPTになれそう」と言ってくれて、じゃあそのキャラを目指そうと思いました。自分の方向性というか、そういうのが見えた1年だったように思います。

### 3) 宮腰英理 (2006年4月6日インタビュー実施)

入社してから

最初の1ヶ月は軽井沢で研修でした。イツモの会社は全国の地域別に数社あるので、それぞれで採用になった人たちといっしょに、会社とは何をしているのかということや、携帯電話の業界はどのように成り立っているのかとか、ひたすら聞いていました。それで夜はみんなですぐ交流を深めます。うちの会社がよく言うのは「ヒューマンネットワーク」なんですけど、研修ではそれを作るということだそうです。会社間をまたがっての仕事もあるので、そういう仲間を作っとくといいよというのもあるようです。

5月になって、全国研修から帰ってきてからも、イツモ東海ではショッパ研修というのを3ヶ月くらいやりました。イツモショッパに3ヶ月間行って、いかに代理店が苦労しているかというのを肌で感じるというものなんです。私が行ったのは岐阜の中でもけっこう田舎のところで、うちの家からでも1時間くらいかかる場所でした。そこで、いわゆるショッパのお姉さんをやったわけです。きゃぴきゃぴで。その時は「なんのためにこんなことをやってるのか、こんなことをするためにここに入ったのか」って思いましたね。

8月の半ばに本格的に配属先に行くようになりました。配属先は4月の半ばに決まっていたんですが、ここ3年はイツモ東海は社長の意向で新入社員をなるべく現場に近いところに行かせるという方針でやっているみたいです。要は現場配属なんですね。私は代理店支援事業部というところに配属になりました。

いざ配属になって、仕事をやり出すと、最初からいろいろとたいへんでした。うちの会社には、3年目の先輩が新入社員について、メンタル的な世話をするというメンターという制度があるんですけど、私のメンターの人が9月の終わりに本社に行っちゃったんですよ。なので、他の新人担当のメンターの人についてもらったんですけど、やっぱりすごくたいへんでした。

実際の仕事はイツモショッパが困ったときのサポートなんです。メンターの先輩が異動したの

で、私が、その先輩がやっていた、ショップからかかってくる電話に出る派遣社員さんのスーパーバイザーの役になっちゃって、夜の8時までその仕事をして、その後に自分の仕事をするというカンジでした。

#### 仕事上の悩み

私が1番あざんとしたのは、8月に配属になったときに感じた、派遣さんの雰囲気でした。これでも職場かと思いました。派遣さんの業務は、ショップから電話がかかってくる暇なんですよ。その時期は、ちょうど暇なときで、みんな結構しゃべっていたんですよ。それを見て、こんな会社で働きたくて入社したのかって思っていました。少なくとも新人は最初に配属された部署に3年はいるということだったので、余計に「ここにいて得るものはあるのか」という気分になって、そこにいる意味とか、なぜそういうことをさせているのかということがつかめないうし、メンターの先輩がいなくなって一気に業務がきた時に、本当に爆発しそうになったんですよ。なんといっても忙しすぎるし、その状況に自分が追いついていけないし、やりたくてやっている仕事なのかという疑問を持っているのに、現実には席にいたら派遣さんにいろいろと聞かれて、その対応をして。派遣さんが「あなたじゃ話にならないから、上の人に代わって」と言われたら、私が出て「代わらせていただきました、申し訳ございません」ってぺこぺこ謝って。こんなことをやりたいから会社に入ったのかなって思っていました。

もともと情報通信をやりたいって会社に入ったわけではなくて、いろんなことができる、多くのことが得られる、と思って入った会社なのに、これがやりたいと思っていたことなのかって、10月くらいには思いつめていました。でも、2年目や、3年目の先輩から、みんなそういう思いを味わってきているという話を聞いて、そうなんだと納得して、仕事を逆にとらえるようになったんですよ。1年目なのにこんなになんでもやらせてもらえるのはありがたい、と。

#### 転職について

心の中では「この業界で本当に自分のやりたいことができるのかな」というのは、ずっとありました。入社時から、心のどこかで、力をつけたらキャリアチェンジと思っていたんですが、働き出してみると、実際に次に仕事を選ぶというときがきたら、もっと専門性をつけてないとやりたい仕事につけないなと思い始めてきて、今は、自分が本当にやりたいことがなんなのかを見極める時期なのかと思っています。でも余裕がないですよ。帰ったら寝るだけだし、休日にもマニュアルとか文書を持ち帰って、ただただ読んで、会社のパソコンから家のパソコンにメール飛ばして仕事をしているときもあって。本当は駄目って言われているんですが、そうじゃないと仕事はまわらなくて。私がそんなことをやらなくても仕事が動いていくということは重々承知なんです。私ががんばらなくても、その時になればみんなが何とかするっていうことはわかっているんですが、全力を尽くしたいというのがわたしの性分なので、毎日があっという間に過ぎていって、自己投資とか自分のためにしたいこととかがなかなかできないです。

出張で東京に行ったりとかに、東京で就職した友だちの話を聞いたりすると、私も東京でもっとバリバリ仕事がしたいと思うこともなきにしもあらずで、だけど、今の会社の福利厚生とか賃金とかを考えちゃうんですよ。それを捨てるのかと。お金なんて関係ないというのはウソなんですよ。もらえるかももらえないかと言ったら、もらえるほうがよくて、がんばっているのならなおさらそうなんですよ。まだうちは会社の建物もすごく大きくて「働いている感」はあるんですよ。立派なオフィスで働いてるんだという満足ですよ。福利厚生はたしかにいいですよ。でもそこに矛盾があるんですよ。もっとこうしたいとか、やりたい仕事があるんだけど、何を

手放せるかと言うと、給料を割り切れるのかとか、好きなことってなんなのとか、やりたい仕事って何ってなると、そういうことを考える暇もなく日々は過ぎて、この1年何をしてきたんだろうと、あっという間でした。本当につくづくそう感じますね。しかも、人生仕事だけじゃないんだろうなというのもどっかで思っていて、人生において何に価値を置いていくのかということも見極めないといけないですね。どういうふうに進んで生きたいのかということ、学生の時は考える余裕もあったし、余地もあったんですよ。今は考える時間がないんですよ。

辞めてキャリアチェンジした先輩とかの話の聞くと、そういうふうに進めた勇気がすごいなと思うんですね。私にもまだキャリアチェンジしたいという気持ちもあるし、また、結婚して子どもを産みたいという夢もあるんですよ。うちの会社だと、結婚もしやすいし、子どもも産みやすいんですよ。その辺は大きい会社って育児休暇とは制度があるんですよ。そういうふうになると、このままこの会社にいるのかなって思ったり、でもやっぱり自分は仕事で東京とか行って刺激を受けたいって思ったりするんですよ。

#### 同僚について

他の同期もこのままでいいのかって言っている子もいれば、ここで満足している子もいます。このエリアですって、実家もこっちで何の不満もないという子もいますよ。同期が1人結婚したんです。男の子で「できちゃった結婚」だったんですけど、もう家族を扶養しているわけですよ。そういう子とはまた感じ方が違うだろうし、ほかの子と話していても私みたいな考え方をしている子は少ないですね。男の子は飲んで楽しければいいという感じじゃないですか。本質的な悩みを同期と分かち合うことはないですけど、先輩と話していると、本当にこれでいいのかというようなことを感じている人はいるみたいです。

本社に帰っちゃった早稲田出身の同じ部署にいた女性の先輩は、私と同じように大学進学の際に1回岐阜から出て就職で戻ってきているというのでなにかと似ているところがあって、同じような悩みを持っていました。1回岐阜から出て、戻ってきた人とは違うのかなということを感じました。本社に帰ってからその先輩の不満は変わらないですね。東京に月に2回、有休を取って興味のある講座を受けているそうです。「仕事は仕事って割り切ようになった」と言っています。「ビジネス系の講座を取って、キャリアチェンジに繋げていく」と、そういうふうにはやらないと何も得られないのかなと思うんですが、今の自分には定期の休みもないですし、そういう不満もあるんですよ。土日の休みが3週間に1回しかないんですよ。なので、平日休みなわけじゃないですか。疲れてるし、友だちと一緒に遊びにいけるわけでもないし、温泉とか1人で行ってるんですよ。

仕事を始めて、現代は、本当に格差社会だと思いました。うちの会社も社員はいいところの人ばかりですし、派遣さんを見ると、学歴もそうですけど、おうちも違いますし。派遣さんに聞かれたんですよ。「どういう家に生まれたら、あなたみたいに育つの」って。「親さんは何をしてるの」とか、何もかも根掘り葉掘り聞かれます。「家族で何を話すの」とか。話してると逆に疲れるというか、私がなんで昼休みが取りにくくて、外に出たいかという、派遣さんと昼休みを取ると、芸能ネタが多くて、オカルトとか占いとかエステとかの話なんですよ。芸能人をおっかけたりとか、本は読まないんですけど、通販のカタログは熟読みたいな。エステとか化粧品の話で盛り上がってるけど、本当のキレイってそういうところから出てくるのかって思っちゃいますよね。時間を有効にとかそういうふうにもあんまり思っていないし、外国語にも触れたことはないし、でも携帯は使いこなしているんですよ。26歳とか27歳になってもギャル文字って言う

んですか、カタカナの『ナ』とカタカナの『二』で『た』って読むんですよ。

ビックリしたのが、会社のメールに「こういう文書お願いします」っていう依頼が入ってきていて、読めないんですよ。ギャル文字なので。「ごめんなさい、これなんて読むんですか」って聞いて、すばらしいなって思って。課長に対しても「これやって」「これして」だし、課長は「おう、わかった」とか言ってるんですけど、それが通用するのかって思ったりするんですよ。普通にいけないだろうって思う常識が違うんですよ。ジーパンがいけないだろうとか、露出はだめだろうとか、そういう常識が違うんです。だから、本社は階によって雰囲気が全然違うんです。会社って小さい社会だから、階層が見えるんですよ。

#### 恋愛について

彼氏とは7年くらい続いてたんですけど、今の部署に配属になって9月、10月くらいにだめになりました。彼氏は岐阜の銀行づとめなので、休みは完全に土日じゃないですか。でもわたしは土日が休みでもないし、夜も遅くて。会うことが無理なんですよ。例えば新入社員の悩みも、彼の悩みはちっぽけな感じがしてしまったんですよ。「こういうことができない」とか「だめだ」とか言うんですね。私が「そんなの誰でも一緒じゃない」って言うと、「大企業にはわからんでしょ」って必ず言うんですよ。地元では有名な銀行で、そんなの関係ないのに。私は久しぶりに会ったときに愚痴しか聞けないのがいやでした。今やっていることについてのがんばっている話とか聞きたいのに、愚痴しかでないと、そこの空間は楽しくないし、私が悩んでいる話をしても「いいやん、最終的にはできるんだから」とか言われちゃって。こんなふうに楽しめない関係であれば、私も相談に乗ってあげることはできないし、私に言った後でも「わかってくれないんだ」っていうスタンスで話してくるんですよ。こんな状態ならちょっと距離を置いて、本当にお互いが必要なのかどうかを考えようということで、10月の頭に別れることにしたんですよ。

仕事のことで、会社の先輩にずっと色んな相談をしていて、そうするとその人の答えが大人なんですよ。でも彼は同級生なんで、すごく子どもに思えるんですよ。そんな気持ちが安定している先輩がいて、その人と年末から付き合うようになりました。

ずっと付き合ってた彼は私がバリバリ働きたいというのを聞いて、「俺がいたから岐阜に帰ってきたけど、そんなんだったら東京とか行けばよかったんじゃないの」って言い出したりして、私は「あなたのせいだなんて全然思っていないし、私が納得して決めたことなんだから」って言ったりしてたんですけどね。でも、離れてみるとわかる良さっていうのもあって、やっぱり存在は大きいんですよ。

親は「とにかくどの人でもいいから早く結婚しろ」って言うんですよ。「どの人でもいいからって、どういうこと」って思うんですけど。だから前の彼と別れる決断をしたときも、ものすごく反対したんですよ。「もう彼でいいじゃない」とか言って。たしかに同じ地元で、親も知っているし、つとめは銀行で堅いし。でも、私はそういう外的要素よりも、一緒にいて楽しいかというような基本的なことが大事なんだという話をしました。

#### これからのこと——25歳、30歳

現場勤務のまま退社したら、このままで終わってしまう気がするんですよ。本社に戻らずに、本体での仕事をしないまま辞めてしまうのはもったいないことだというふうに思っているんで、少なくとも後2年は我慢しよう。苦しいと思うからこそ大事だと思うんです。よく本社は口先だけで「お客様本位」とか言うんですよ。でもそれは本当に現場でいて、お客様の声とか代理店の声とかを聞いていないとできないことなんですよ。今の現場野仕事をやることで、そういうこ

とを活かせるかなと思っているので、25歳になったら、本体でその気持ちを活かしているかなと思います。でもどこかで第2新卒もありかなって思ったりもしているんですけど、きっと今の会社にいるんでしょうね。

今は中身も外見も自分なりに努力して磨いていたいというのはあるので、本は読み続けて自分の興味のあるいろんなことを勉強していきたいと思います。現実はそのいうふうに行くのかというと、日々の仕事に追われるんだらうなと思うんですけど、30歳には結婚はしたいですけどね。大学院にいったらもう1回、勉強もしたいですね。大学時代にお世話になった先生にも、いつだったか1回メールしたんですよ。そしたら「今の時代は会社に通いながら大学院に行くこともできるから、会社で経験できることはそう味わるものではないから、味わっておきなさい」というような返事でしたね。

いろいろぐちゃぐちゃ考えています。「毎日ほんとに楽しいな」なんて思って生活している人はいるんでしょうかね。でも、うちの会社は働いている人がいいなあと思いますし、なんだかんだといっても仕事にはどこかでひかれるところがあるんです。だから続けられるのかな。

### 3. おわりに

前節で示した3人のインタビューには、当然のことながら、個別なものと共通することが存在する。ここでは、その共通することに関しての簡単な記述を行いたい。

インフォーマントのうち、ふたりはある程度の満足がいく就職活動の結果を得て、「やりたい仕事」についている。残るひとりも、大学の時には取得できなかった「やりたい仕事」につくために必要な資格を取ろうとしている。それらからすると、「やりたい仕事」につく、つまり、仕事による自己実現を目指した（目指している）というのが3人に共通することである。が、職についているふたりの話からは、ただだけでは自己実現には至っていないことが理解できる。当然のことながら、仕事において何をどうすれば自己実現となるのかわからず、まずは目の前のことをこなしているといった状態である。けれども、その先には何かあるだろう、という気持ちも確実に持っている。それは玄田有史がいう「仕事の中の曖昧な不安」(玄田2001)や「希望」(玄田編2006)という言葉を借りて言えば「仕事の中の曖昧な希望」といえるだろうか。そして、その「仕事の中の曖昧な希望」と、家族や恋人との関係を重ねたライフコース展望(その中に、「都市と地方」の地域移動も含まれるだろう)を合わせて考えようとしているのである。そのためか、意思による確定—偶然によるものは別として—の前の待機状態といった段階のようにうけとることができるのである<sup>2)</sup>。これらからわかるのは、あたり前のことであるが、「やりたい仕事」についただけでは自己実現となるわけではないということである。それともかかわってくるライフコース展望が存在し、インフォーマントたちはその両者を合致させられるように、その可能性を求めて、決定をしきらずにいると思われるのである。

今後は、この考えをふまえながら、本稿でのインタビューデータを用いて、20代の女性にとっての「自己実現」について、機会を改めてくわしく考えていきたいと思う。

#### 注

- 1) インフォーマントのプロフィールや大学入学までのこと、大学入学後のことなどについては、工藤(2005)を参照してほしい。

- 2) 吉川 (2001) は、ある地方の公立高校における国公立大学進学クラスの生徒の、卒業後6年間の青春をえがいたものである。そこには12人の「ショート・ライフヒストリー」が紹介されているが、それらは本稿でのインフォーマントの1年後の状態にあたる。それらを見ると、大学進学で都市に出た者の多くは、24歳の時点では、ライフコース「展開」を確定しているように思える。そうならば、吉川 (2001) のものでは「確定」、本稿のものでは「確定前の待機状態」、となる違いはどこに存在するのであろうか。「24歳時点と23歳時点の違い」なのだろうか、それとも『『地方の地方』出身者と『地方の都市』出身者の違い』なのだろうか。このことも、今後、くわしく考えてみたい。

#### 参考文献

- 玄田有史, 2001, 『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社  
———, 2005, 『働く過剰』NTT出版  
——— 編著, 2006, 『希望学』中央公論新社 (中公新書ラクレ)  
香山リカ, 2004, 『就職がこわい』講談社  
吉川 徹, 2001, 『学歴社会のローカル・トラップ』世界思想社  
工藤保則, 2005, 「『女性の20代』研究序説」『仁愛大学研究紀要』(3)  
———, 2006, 「大学4年生の風景—女性の20代研究・その2」『仁愛大学研究紀要』(4)

付記 本稿は「平成18年度仁愛大学共同研究」の研究成果の一部である。